

サイオウマガトキ

～設定集～

ネタバレだらけなのでゲーム版プレイ後、もしくは小説版
読破後に読んでください。

～Contents～

キャラクター

上代 冬馬	2
日出 榊	3
神代 炎騎	4
その他	5～6

ストーリー	7～8
-------	-----

おまけ	9～11
-----	------

あとがき	12
------	----

CHARACTER

かみしろ とうま
上代 冬馬

現魔王、神代炎騎の実の息子で、魔界の第3皇子だが、魔界での掟により人間界で育てられることになった少年。幼少のころは児童施設で過ごしたが、現在は考古学者である上代夫妻のもとで生活している。高校に入ってから一人暮らしを始めた。



元来温厚かつ遠慮がちな性格で、自分の希望を表に出すことを苦手としている。施設で小学3年生まで過ごしたためか、弟妹分の面倒をよく見ており、困っている人に対してはかなり敏感で親切。ただ、社交的な人付き合いはあまり得意ではなく、少しナイーブな面も。

榊と出会い、芯がしっかりしている彼女に対して一種の憧れを抱く一方、確固たる目標も持てないまま高校生活を過ごしている自身への劣等感も覚えていた。決して彼自身のポテンシャルが低いわけではなく、思い込みの面も大きかったのだが、自らを積極的に肯定する前向きさが彼には足りなかったのかもしれない。

彼の武器の一部である氷の鎖は、彼の心の自由を縛るしがらみそのものの象徴とも言える。ただ、それを断ち切ったあとの力は魔王の息子という代名詞に相応しいもので、魔神獣の力は魔界中のあらゆる生物のうちでも最強といわれている。

ちなみに、彼の父である魔王の真の武器も、彼と同様に魔神獣で、白馬の対となる黒馬である。現時点で魔神獣を操れるのは魔王と冬馬のみと思われる。

Tips

- 少し童顔なのを気にしている
- 髪の長い娘がタイプ
- つまり榊には結構一目惚れ

エンディングののちは、宣言通り、榊に相応しい男になるべく、部活をはじめ、リアル生活に奮闘し始める。

ひいで さかき しがみ さかき
日出 榊(死神 榊)

古から魔王に仕えてきた死神一族の生き残りの少女。死神一族は軍にも属さず、代々魔王を直に支える影の存在であり、その高い戦闘能力と死を司る特殊な能力は、魔界人の多くに恐れられていた。

実の息子である冬馬を人間界に送ることになった魔王夫妻は、彼女を実の娘のように育て、彼女もその愛を受け伸び伸びと育てていたが、物心つくようになり、周りの偏見の目に気づくようになってからは、『申し訳ない』という気持ちが勝るようになった。その変化に気づいた魔王夫妻は彼女に、『家族』としての親愛の証である黄巾を与えたが、彼女はそれを死神の武器である鎌に巻きつけ、あくまでも夫妻の『護衛』として側に置いてほしいことを主張した。

ちなみに、魔界でも彼女は学校に通っていたが、死神一族への偏見が強く、友人と呼べる同級生はひとりもない状態で、常に自分の居場所を探すような心境だった。

魔王夫妻の息子である冬馬の身に危険が迫っていることが分かったとき、真っ先に彼女は彼の護衛を志願する。内心、自分の身代わりで人間界に送られた皇子と対面することは彼女としても複雑なところではあったが、自らが決めた『魔王に尽くす』という使命を全うするべく人間界に渡る。

人間界に渡って2か月間は、彼を遠巻きに護衛していた。人間界に渡ったときすでに彼女の「人目を忍ぶ」術は効力を発していたが、ある朝、何らかの原因でその効力が一時的に薄れ、たまたまその時に彼女の鞆を蹴飛ばした冬馬と言葉を交わすことになる。2か月の間、誰とも言葉を交わさないという状況が彼女にストレスを与えていた結果かもしれないが、言い換えればこれを運命というかもしれない。

Tips

- 胸がないのを気にしている
- 少し頼りないくらいの相手のほうが守りがいがあると思っているかも
- 敵に対しては本当に容赦ない

彼女の武器「赤誓鎌」は、作中でも語られた通り、忠誠を誓った相手のために流す血を糧にする武器だが、回復の効力も備えている点が唯一無二の特色であり、武器単体では間違いなく魔界で最強のものといえる。



かみしろ えんき
神代 炎騎 (魔王)



現魔王で、冬馬の実の父親。

もともとは魔界の秘境に住む稀少部族の出で、ある時ふらりと王都を訪れ、妻となる楓と出会い恋に落ちる。前魔王には息子がおらず、娘の楓の夫となる魔王後継者を武力で選定するとし、国を挙げての

武闘会が開かれた。大衆の面前で名だたる武人たちを無名のまま倒して優勝した彼は、国民の支持と前魔王のお墨付きを得て楓と結婚するが、血筋を重んじる城の長老たちの反感を買った。

王族に貴族の血を絶やさぬよう、長老たちは様々な画策をする。魔王には重婚が認められていることを利用し、ある貴族の女性を側室に無理やり据えたのもそのひとつ。しかし炎騎はその側室のもとへは一度も訪れない。側室はそのことに憤慨し、別の貴族の男との間に双子をもうける。

長老たちはこれ幸いと、その双子を炎騎の息子として第一皇子第二皇子とし、その後楓が授かった彼の実子である冬馬を人間界に追放するよう仕向けた。

この一件で長老たちと魔王との間に明確な亀裂が生じ、代々魔王に直に仕える死神一族が長老たちを粛清する動きを見せた。そのことを察知し恐れた長老たちは、吉田の父である特異な「移動力」の使い手を言葉巧みに利用し、秘境の魔物を召喚させ死神一族を住処ごと蹂躪した。長老たちが男を人間界に追放し証拠を隠ぺいしたため、炎騎は彼らを追い詰めることが出来ず、また、死神の生き残りである榊の処遇の件もあり、彼は息子を手放す辛い判断を迫られた。

ちなみに、第一皇子第二皇子は炎騎のことを実の父と信じており、その信頼も裏切ることができないでいる状態で、非常に苦しい立場にありながらも彼は王座にあり続けている。王であるがゆえの苦しみをよく理解しているからこそ、その責任から逃れることはできないという決意が彼を動かしている。彼の施策は格差社会だった魔界に変革をもたらす新しいもので、彼を慕って魔王直轄軍に志願する兵も多い。

彼の魔神獣は炎を操る黒馬。彼の内に秘めている炎を表しているようだ。

かみしろ かえで
神代 楓

前魔王の一人娘で、炎騎の妻。現魔王の正室という立場になる。

脈々と続く王家の血を継いでいるが、近親婚が多かったためかここ数代の王族の力は徐々に弱まってきており、楓に関しては魔界人の能力の1つである武器の発現ができない。

女性であるため武器がなくても困ることはないが、本人はそのことをかねてから気にしており、自らが嫁ぐのは魔界で最強の男性と、幼い頃より決めていた。

年頃になり、婿選びの話が進む中で、炎騎と運命的な出会いを果たし彼と恋に落ちる。しかし彼女には魔王の妻となる決意があり、彼を一度は遠ざけるが、炎騎は彼女の心に応えるようにして魔王選定の武闘会で見事優勝する。

それからの苦労を炎騎とともにし、実の息子を手放すことになってしまった彼女だが、夫を恨まず、運命を恨まず、人間界にいる息子の健やかな成長だけを遠くから願っていた。

常に孤独な夫を支え、榊を実の娘のように愛情をもって育てた彼女は、魔界のファーストレディに相応しい存在。ただ、時折はめを外したくなるようで、たまに親密な関係にある侍女や海星に無茶な頼みごとをして彼女らを困らせることがあるらしい。

ひとで
海星・キャサリン

魔王直轄軍3番隊隊長。直轄軍隊長の中では唯一の女性で、魔王、王妃の信頼も厚く、特に楓とは旧知の中で行動を共にすることが多い。

少女時代より城の軍に入隊しており、榊を幼少の頃から見守っていた姉のような存在。片目を眼帯で隠しているが、失明しているわけではない。

武器は二丁銃。能力は秘密としてあるが、身体能力全般が高く非常に有能。ただし豪快な性格もあって戦闘はかなり派手になる。

余談だが、ゲーム本篇では緑髪つながりでゲームの攻略ヒントコーナーを担当する予定だったが、立ち絵の関係で泣く泣くカット。彼女の活躍は続編までお預けとなった。

吉田 実

冬馬のクラスメイトで、絵に描いた優等生だったが、その正体は人間と魔界人のハーフで、かつて死神一族を滅ぼした男の息子にあたる。

「移動力」とは本来、「走力」の延長線上にある能力で、あくまでも自らが移動するための能力なのだが、彼の特異な「移動力」は、自身以外の別のものを移動させる力である。この能力により魔界の秘境に住む魔獣を召喚することが可能になったり、他人の能力を自らに移動させることが可能になる(後者に関しては他にさまざまな準備が必要となる)。

幼い頃より父から魔王になるよう教育されてきたため今回の凶行に至っているが、本来は素直な性格。氷漬けにされたのちは魔界に移送され、更生される予定。

ハリス

魔界貴族の男。幻術に長けているが、戦闘能力はほとんどない。ただ、その美貌とカリスマ性で人を寄せ付ける力はあるようだ。

今回、人間界にいる冬馬に目をつけ、恋人のエイリとともに人間界にやってきた。冬馬の心の際に付け込んで彼を取り込み、魔王のほうから王座を明け渡させる予定だったがあえなく失敗。

冬馬に氷漬けにされたのちは魔界で薬師の手により蘇生してもらい、エイリとともに更生の道を歩んでいるとか。

エイリ

ハリスの恋人。同棲してるけれど籍は入れていない、昭和系のバカップル。オバサンオバサン言われているが、言うほどおばさんではない。

魔法使いのような杖を武器としており、攻撃術に特化、呪術にも精通しており、ハリスよりも腕は立つどころか白兵戦では榊ともやり合える手練れ中の手練れ。

かつては身寄りもなく、すさんだ生活を送っていた彼女だったが、ハリスに見初められてからは彼を生きがいに日々研鑽。意外に努力家なのであった。



6月のある朝、上代冬馬はあるクラスメイトの鞆に蹴躓く。鞆の持ち主の少女は、クラスメイトでありながらもまったく見覚えのない少女だった。

その日の放課後、彼は怪しげな黒衣の女に声をかけられる。身に危険を覚えたとき、彼の前に降り立ったのは、今朝の、名前も知らないクラスメイトだった。

彼女——日出榊に、「貴方は魔王の息子である」と告げられた冬馬は困惑するも、とりあえず彼女の言葉を信じることにする。榊は冬馬の護衛をすと言い、学校でも常に彼を見守っていた。自らの存在感を他人に認識させない術を行使してまで護衛活動をする彼女を冬馬は気に掛け、家に招く。そこに再び黒衣の女——エイリが現れ、榊が負傷。それを見た冬馬は魔界人の能力の片鱗を発現させる。



榊の鎌の力でエイリを撃退するも、彼女が受けた傷はただのそれではなく呪詛ご織り込まれていた。激痛に苛まれながらも、榊は冬馬の、魔界人としての覚醒に力を入れるべく彼を指南する。しかし、その訓練の最中呪詛の痛みに耐えきれず榊が倒れ、薬を買いに街へ出た冬馬を魔界人のハリスが襲う。痛みをこらえて冬馬を助けにやってきた榊は、満身創痕の状態でも彼を必死に逃がそうとするが、冬馬は、彼女がどうして

自分のためにそこまでするのが分からず憤慨する。そこで敵の口から、榊は自分がいたせいで皇子が人間界に追いやられたのだという責任を感じていることが判明。余計なお世話だとますます憤慨した冬馬は魔界人の能力を暴走させ敵を仕留めるも、彼女に「魔界へ帰れ」と叫んでしまう。



魔界に帰還した榊は、人間界での出来事を魔王夫妻に報告。冬馬との出来事を旧知の海星に相談し、どうしてこうなったのかを自問自答することに。

一方冬馬は、榊につらく当たってしまったことをずっと後悔していた。彼女に会って謝ることを決めた彼だったが、時はすでに遅く、榊の存在記録が抹消された後だった。

落胆する冬馬を、突然クラスメイトの吉田が襲う。彼は魔界人と人間のハーフであり、かつて魔界の死神一族を滅ぼした男の息子だったのだ。彼は父から「魔王になる」という夢を託されており、冬馬をずっと付け狙っていたという。冬馬を殺し自らの能力を移動させるという吉田は、抵抗を見せた冬馬の前に巨大な火竜を召喚し彼を圧倒する。



そこに再び、榊が現れる。彼女は冬馬をかばい、凶刃をその身に受けるが、盾のように彼を守り続ける。冬馬がなぜかと問うと、彼女は微笑んで答える。

「私は『貴方』を守りたい」と。

既に彼女の心の支えは、魔王から冬馬へと移ろっていたのだ。

彼女の「死神の接吻」を受け走馬灯を見、奮起した冬馬は、真の武器である魔神獣を召喚。見事敵を倒すが、榊は失血多量で倒れてしまう。そこに現れたのは冬馬の実の父である魔王。榊の武器の契約を結びなおし、彼女の傷を癒すことに成功する。

1件が落着し、榊は魔界へと戻ることになるが、冬馬との再会を約束。冬馬も、彼女に見合う男になること決意する。



おまけ

過去に描いたサイオウマガトキ関連の絵を何枚か。……といってももともと小説を書いたのが随分前になるので、あんまり数がなかった！



小説を改訂したときにらくがきで描いた榊さん。この絵を描いたときには既にノベルゲームにする流れを意識して塗っていたような気がします。これは線画がザカザカですがいつかほんとにアニメ塗りをやってみたいなーと思っている今日この頃です。



(↑) 東日本大震災が起こった後一時創作意欲がまったく沸かなかったんですが、イラスト投稿サイトで「見た人が元気になれる笑顔イラストを描こう」という趣旨の企画があって、それに乗かって描いた1枚。



(←) 7年とか随分前に描いたSDキャラ。当時私の中でSDキャラを描くのがマイブームでした。ゲーム版では冬馬くんの後ろの髪を意識してちょっとツンツンさせてます。半覚醒状態ではオッドアイ設定だったんですが(笑) アニオイトで売られてた中二病クッキーともろに設定が被ってショックだったのでゲーム版ではあえてそこには触れてません(爆)! ほんとなんなの中二病のバカ! でも好き!

なんとか恒例のこの自己満足本まで完成させることができました。ゲームを完成させるので手いっぱいだったのでどうなることやらと思いましたが案外できるものですねえ。

ゲームのあとがきでも書きましたが制作中は本当にモチベーションの維持が難しい時期で、もともと別の長編をゲーム化する予定だったんですけど、「無理!」と思って、前作でアンケートをとった中に続編でサイマガ希望が1件あったしちょうどいい尺だったのでこの作品を選んだんですが、この度のお正月の9連休があってほんと助かりました。できるできる詐欺にならなくてほんと良かったという安堵しか今はないですほんと。

でも改めて振り返ると、この作品には本当に自分の好きな要素ばっか入ってるなあという感じですね。確か一番初めは1枚絵を描いたところからスタートしたように思います。死神の鎌を持ったセーラー服の女の子と、鎖のついた剣を持った男の子の絵でした。それをそのまま話にしたのでなんというか、ほんとにそのままなんです(汗)、バトルヒロインは今も昔も好きです。

今回小説をゲームにするにあたってはゲーム独自の選択肢を置いていったんですけど、今回は自分的に今までで一番ベストエンドに辿りつくのが難しいです。自分でテストプレイしててもなんか意識してないとノーマルに行ってしまうという。一応意味を考えて好感度は考えてるんですけど、榊さんはそれだけ複雑なヒロインなんだろうなあ。

個人的には複雑な2人が和気藹々、ラブラブ(?)としてるのが好きなので、続編のあとのアフター話のほうを書きやすくてよいです。ということで是非続編も……ってというかこのゲーム最後まで見てくれた人いるんだろうかと心配になってきたわ(汗)。そしてこの文を読んでもくれる人はいるんだろうか……!?

という独り言で締めくりたいと思います。本当に、ここまでお付き合いいただいた方々、いらっしゃったら本当にありがとうございます!

平成26年1月26日 あべかわきなこ



ありがとうございました！